



2011年12月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2011年12月
第 89 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

点字から識字までの距離（85）（山内 薫）	1
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	15
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	20
ご報告とご案内	22
漢文のページ	23
漢点字講習用テキスト（初級編・第29回）	26
編集後記（木下和久）	27

都合により「漢点字の散歩」はお休み
します。

点字から識字までの距離（八十五）

野馬追文庫（南相馬への支援）（三）

山内 薫（墨田区立あずま図書館）

その後の状況

九月の末には仮設住宅がさらに六カ所増えて、一八カ所から二四カ所になった。（ホームページによると一〇月二〇日時点で、南相馬市内に二五カ所、相馬市内に三カ所となっている）また、九月三〇日には緊急時避難準備区域が解除された。南相馬市の緊急時避難準備区域は原町区のほぼ全域と鹿島区の一部を含んだ市域全体の三分の一を占め、震災以前の緊急時避難準備区域内の居住人口はおよそ四六、七四四人（市全体の人口は七一、五五九人）だったが、避難のピーク時には七千人から八千人に減少したと推測されている。それが九月一二日現在で、二八、一二二人となった。

（市内全体では四〇、一七二人）（以上は『緊急時避難準備区域解除に係る復旧計画』南相馬市、平成二三年九月作成による）その後、一二月一日現在では市内居住者は四二、八八四人、市外避難者が二三、〇八三人、その他死亡や転出、所在不明が五、五八九人で全域警戒区域の小高地区を除いた原町区と鹿島区に居住

する人の総数は四三、五四八人となっている。総数が居住者数より多いのは他地域から南相馬市に転入してきた人を含むためである。（南相馬市のホームページより）

Wさんによれば

「私の見込み（全くの個人的なものです）では仮設住宅は五〇カ所ぐらいまで増えるかも知れないと思っております。南相馬市はいわき市とともに、市民に限らず、二葉・檜葉・大熊・浪江・飯館という他の町村から避難されている方も仮設住宅に受け入れてくれているようです。なんと懐の広い市なのでしょう。市の中心部が東京電力福島第一原子力発電所からおよそ二五キロという所で、自らが被災しているというのに。きっと福島県沿岸部のこころのふるさととして、繁栄して行くことでしょう。良い図書館があるところ、暖かい人々が暮らすところには必ず良いことが起きます。それは人間の歴史そのものなのだと思います。そのお手伝いできて、私は幸せです。」また「『男の料理教室』（仮設住宅に住む単身高齢の男性世帯が対象）で、七月の初回から参加されたある方は、今回の九月七日の会では顔が生き生きとし、食事作りにも積極的に参加して、食事もおいしそうに召し上がっていました。奥様や家を根こそぎ流された三月一日のことを初めてお話しをされるといふ感動的な場に立ち会うことができました。」

そして、今まで本の送付先だった保健師のOさんから送付先変更の下記のようなメールがKさんに届いた。

「今回も、布絵本をお送りいただきまして重ねて感謝申し上げます。原町保健センターでも十一月十七日から三歳児健診を再開します。そのときに、遊びながら待つ時間があるので、うまく使わせていただければと、考えています。母子保健係のほうにお渡ししたいと思います。」

さて、災害ボランティアさんのおいでいただく状況等が変化してまいりました。従来、原町保健センターで朝ミーティングを実施して活動に入っていたいただいたのですが、それも十月末で終了しました。今後の、仮設住宅への支援については、社会福祉協議会の生活支援相談員さんが他のボランティアの支援を受けたりしながら、一手に引き受けるような構図になっています。

そこで、ご相談なのですが、わたしたちもコーディネートはさせていただきますが、実働としては生活支援相談室が中心になります。なので、今後の、絵本の送付については、主任生活支援相談員のR氏にお願いできればと思うのですが、いかがでしょうか。

今までも、生活支援相談員さんたちに絵本にテプラで仮設名称を入れていただいたり、何回か配本のお願いなどしておりました。」

「少しずつ、仮設住宅への支援形態も変わってきてつ

あります。また、各仮設集会所のサロンも絵本を始め、大人向けの小説などもおかれ始まっているようです。本日は午前中にある仮設の集会所でヨガがあると聞いて、職場の同僚といってみましたが、すっかり集会所は素敵になっていて、外のベンチ等に集っておしやべりしている姿などもあり、少しづつ落ち着きを取り戻している方のいることも、実感してきました。そうは言ってもすべての仮設集会所がこのように整っているわけではないのですが。

今後、寒さに向けての対策、インフルエンザ等の予防のことなどもあります。ひとつずつ、クリアしていきたいです。サロンに、栄養士や歯科衛生士なども講話に出向いています。来週あたりから、足腰元気に：を目指して、健康運動普及にOTや保健師、健康運動普及元氣もりもりあげ隊が出向いていく予定です。普及するのは『波乗り体操』です。この体操は実は昨年九月ごろ出来上がっていて、本年度には普及すること進められていたものでした。時期遅れになりながらも、少しづつすすんでいます。

絵本の送付先について、どうぞ、ご検討よろしくお願ひいたします。」

その後の経緯についてのWさんからの報告。

「私が訪れた5月から原町保健センターは、避難所や借り上げ住宅、仮設住宅に住まわれている被災に遭われた方々の命と健康と福祉を守る前線司令部としての役割をはたしていたように思います。はじめは薬局

が開いていない中で患者さんに菓を届けるという活動もされたと聞きました。そこには市の保健師の方々を始め、保健と医療にたずさわる市の職員の方や、市の社会福祉協議会やその他の民間社会福祉施設の人々、市内の人権擁護委員などの三月十一日以前からの組織されたボランティアの方たちが集まり、それに他県からボランティアとして派遣された医師や看護師、保健師、精神保健福祉士なども寄り集まって、毎朝会議をおこない、昨日の報告と今日の動きを確認しあって、その日のそれぞれの持ち場に着くということを繰り返して来ていました。

しかし、その活動は十一月から大きく変わりました。それは私が思うに、市内に住む市民の方が四万人を超え、被災され続けている方々に対応する仕事にブラスして、従来の業務をも行政がはたさなければならぬことに対する動きだと思います。避難所は十月末で最後に残る二カ所が閉鎖されました。仮設住宅は自治会という自治組織が機能を始め、それを助ける組織が社会福祉協議会の生活支援相談員（八月一日から配置されました）の方々に移ってきました。七月から仮設住宅集会所でのグループワークの主体としておこなって来たケアワーカーの人たち（市の社会福祉協議会の職員の方たちです）は十月から本来の高齢者のデイケア施設や在宅介護の仕事に着かれました。被害が大きかった小高病院（小高区は警戒区域で立ち入ることができません）の看護師さんが原町保健センター

付けて九月一日に配置されましたが、十月末で、市立総合病院に異動されました。このように毎月行くごとに大きく変化し続けて来た南相馬市で、原町保健センターのはたす役割が変わったのでした。十一月からは毎日おこなって来た会議は原町保健センターではおこなわれなくなりました。そのことをOさんは言われたのだと思います。原町保健センターは一部の例外的な活動をのぞき、四万人を超える市民全体に対する仕事をおこなうことになったのです。

十一月からは鹿島区の社会福祉協議会の中にある生活支援相談員室が仮設住宅に関係する様々な活動の拠点となりました。生活支援相談員の方たちとは八月から各仮設住宅集会所のグループワークをご一緒させていただきました。手に余るようないろいろな困難に立ち向かわれている方々です。そこを統括されているRさんは私が専門職ボランティアとして初めて会議に出させてもらった当初からOさんに紹介を受けた方です。すばらしい強靱な意思をお持ちの方です。私は信頼を申し上げていますし、Oさんとも連絡を密に取っておいでの方です。山内さんのパンフレットも読んでくれていますし、私たちの思いをきくと主体的に理解されていると思います。

Rさんは小高区社会福祉協議会の所長さんでありました。そして、避難命令が出て以降、小高区社会福祉協議会の職員の方を率い、また、ケアワーカーの方々を率い、現在、生活支援相談員の人たちを率いている

方です。足繁く避難所や仮設住宅を訪ねて住民の方々を励ましている姿を目にしました。ざつくばらんで非常にリーダーシップのある方です。とりあえず今日はここまでをお送りします。これまで以上に『野馬追文庫』の果たす役割が大きくなるのではないかというのが、私の中心的な思いです。」

野馬追文庫

さて、新たに開設された六カ所には他の仮設住宅の集会所と同じように一〇冊プラス九月に送った三冊の計一三冊ずつの本が送られた。また、十月分として、紙芝居が品切れで入手できなかったために絵本の『注文の多い料理店』（宮沢賢治原作・スズキコージ絵、ミキハウス）と『落語絵本じゅげむ』（川端誠著、クレヨンハウス）が送られた。乳幼児がいることが分かった五カ所には合わせて布の絵本も送られた。宮沢賢治の作品では、畑中純の『木版画 どんぐりと山猫』（筑摩書房）をWさんが推薦したが、こちらも残念ながら品切れで入手できず、『注文の多い料理店』の数ある絵本の中からスズキコージの絵本を選んだのだった。

一〇月に何を送るかという問いに対する私の次のようなメールを巡って、何を送るかという話題が持ち上がった。

「川端誠の落語絵本でどれか一冊でどうかかなと思います。親と子ということでは『じゅげむ』か『はつ

てんじん』、季節としては『めぐろのさんま』あとは『まんじゅうこわい』あたりでしょうか？絵本では、個人的には『こすずめのぼうけん』（ルース・エインズワース作、堀内 誠一絵、石井 桃子訳、福音館書店）などどうかなと思います。まだ一ヶ月ありますから、幼年童話も考えてみます。」

Yさんからの返答

「『こすずめのぼうけん』なつかしいです。ああ、そうだこんな絵本、あったなと。人の育ちにとって普遍的ですが、根本のテーマがありますね。よい絵本だと思います。この絵本に関連して、ぜひご意見をお聞きしたいことがあります。震災直後、ワーと被災地の子どもたちに本を届ける動きが起きたとき、選書をするかかしないかという二つの動きがありました。どんな本もいいという考えもありました。私たちは避けたほうがいい本、津波や地震、今回の『あひるのおうさま』（堀尾青史脚本、田島征三絵、童心社）のような洪水、人が亡くなること、恐怖体験などは抜いてきました。このことは割りと反対する声は少なかつたように思います。私の中ではもう一つ、幼い子どもたちの絵本にとっても多い親子、特に母子テーマ、お母さんの胸に抱かれる、家族みんなそろって幸せ、それが大事みたいな本もちよつとつらいものがあつて初めのころはとくに抜きました。今回の震災で、私の心に残った大きな衝撃として、もう二度とお母さんやお父さんに抱いてもらえない子どもたち、自分の腕にわが子を二

度と抱きしめられないお母さんたちの姿が、私には余りに大きなショックで私自身がそういう本がつかなくて見れなかった。でも、お父さんの思い出お母さんの思い出として、そういう本もいいのではという積極的な声も当時からありました。今半年たつて、どうなのか、私自身の中で、まだよくわかりません。一〇月選書分にあたり、山内さん、Wさんのご意見を是非この際伺えたら幸いです。南相馬に沿ってのご意見でかまいません。よろしくお願いします。」

それに対する私のメール。
「『こすずめのぼうけん』は、もう何度も子どもたちを読んで読んだ本です。この絵本の後半で、遠くにお母さんの影が見え、こすずめはお母さんと対面して巣に戻って眠りますが、安心しきって眠りにつくつばさは必ずしもお母さんである必要はない普遍的なものを表していると思います。優れた物語の力は現実の状況を超越すると思います。確かに今回の南相馬の仮設住宅への絵本や紙芝居の送付は周囲の者が読んであげることが前提に考えていますので、複数の子どもや母親などが同時に聴くことを想定して選んでいます。そうした場で先日話題になった『おふるだいすき』などはふさわしくないかもしれませんが、もし仮設住宅の中でお母さんと子どもが二人で読み合うのであればこの本も否定すべき本ではないと考えます。Wさんも言っていますが、この状況にふさわしい一〇〇冊の本を選ぶとい

う意味では『おふるだいすき』は選ばないでしょう。一〇〇冊だったらあっても良いかなと思います。それは南相馬図書館に行けばよいことですね。今後、送った本がどんな風に読まれたかを検証しながら次の本を選んでいくという作業はワクワクしますね。はじめから一〇〇冊を選定するのは無理だと思います。私としては昔話や落語絵本を通して、お年寄りや大人が自主的に子どもに本を読んであげるといった状況が生まれればと期待しています。」

そこで、今回の毎月二〜三冊を継続して送り続けるという支援のあり方についてWさんの意見は以下のようなものだ。

「Oさんと話したのですが、一〇〇冊の本の基本的な位置づけについてです。私はもとから、仮設住宅に住む子とその親や祖父母の方のものと思いついていましたし、Oさんもそう思っていたのです。しかし、新しい本が送られてくると大切にしたいというのも人情で、みんなの本とか、図書館の本と同じという感じをいただく人もいます。ですの、「極論ですが、寒くなると、子どものためにたき火につかってくれてもいいという本なのです」と言いました。「気に入ったら、自分の住宅に持っていったって、一年でも返さなくてもいいし、親子でふとんで見てくれてもいい。貸し出し簿も本当はつけてほしくなく（それは自治会の自由なのですが）、破ってもいいし、落書きもまた貴重な財産

となるという本たちなのです」と、私のこの本たちにかける思いをお話しました。「図書館の本ではありません。それには〇さんも、そう思っていたと言ってくれました。山内さん、Kさん、それでいいのですよね。曝書もない、どこかに紛れ込んでなくなってもその責任は問わない。昔小学校の先生が自分の給料でクラスに備えてくれた「学級文庫」の発想で。それで一人の命や人生が豊かになってくれれば、お金も努力も惜しくないと思えるので。これは個人的な私の思いです。昔、一九七五年当時組合要求で、三千円以上の

本も全て消耗品へと要求して実現した図書館の図書的位置づけはどこにいったのでしょうか。盗難を恐れ、人に検知器をくぐらせることが児童室を含めて当たり前になってしまったのは中小図書館レポートの精神からすれば墮落してしまっているということなのですよね、山内さん。一冊一冊本を開け、切り取りがあるかを点検する図書館員って悲しいですよ。切り取られた本よりもっと悲しいと思います。葛飾の図書館が、離れているうちにそんな風に変わっているのを昨夜知りました。それではカウンターで感想を聞くなんていう業務はどこに行ったのでしょうか。「そう面白かった。では、つぎにこの本はどう」とか言って紹介するのも。少しのお金を惜しむために図書を大切にしようというところそのものを、だから大きいお金を失うことになっていることに幹部は気付いていないので

しようか。そんな幹部に給料を払うことが一番もったいないと思うのですが。これのようにそのように、南相馬での出来事や会話が、葛飾の現状を照射する気がしてなりません。余談です。

揺れ動くところは、南相馬中央図書館の児童室で、その選ばれた絵本たちの前でも起きます。一〇〇冊を選ぶということは、大それたことをしているのではないかと。私の仮設住宅などでのボランティア経験からくる感覚をお話することが、その一〇〇冊を規定する大きな要素になっていることに不安を感じる訳です。でも、錯誤がないように心配するあまり、自己の判断を保留し、感じることで、考えることを他人まかせにしているのは、実際何もなし得ないばかりか邪魔になるだけなのは南相馬で学びました。謙虚に傾聴し、物事を見つめ、こころをできるだけだけ穏やかにしてそれが命ずることを、最大限の思考力で用心深く考えそれをする。結果はさまざまにゆだね、間違えたと思えば、謝罪をする。こう生きることしかできないし、こう生きることができれば悔いはないと思うのです。私たち（さまざまな方に支えられている）の活動は単に子どもの本を送るということではなく、子と子をとりまく親と祖父母などの方々にメッセージをこめた本を継続的に送ることで、見捨てはしないことを、命を、生きる希望を（口はばつたいたことですが）お届けしたいと願うものです。Kさんや山内さんがおっしゃられているように一〇〇冊は私たちがメッセージをこめてお送

りするもの、各仮設住宅集会所が二〇〇冊の児童図書で、もつと多くの本で書架がいっぱいになっても、それはゆだねてゆくものだと思います。」

八月二四日に立川で話し合った際、今回の南相馬に子ども本を送り続けるという活動に何か名称を付けたいかという話題になった。南相馬の方たちが最も大切にしている祭りである「野馬追」は東日本大震災で大きな被害を受けたにもかかわらず今年も開催されたが、その相馬野馬追にちなんで今回の活動を「野馬追プロジェクト」という名称にしようかという話も出たが、結局決まらなかった経緯がある。その後メールのやりとりの中で私が「野馬追文庫」ということばを使ったところ、以下のようなメールがWさんから届いたのだった。

「すてきですね。「野馬追文庫」ですか。決まりですね。これは、符牒のようなものでいいのかなと私は考えています。つまり、三人とそれを廻る人々の。「福島県南相馬市に点在する各仮設住宅群の集会所に毎月定期的に児童図書を送る活動、一カ所におよそ一〇〇冊を指して」と一気呵成に知人に説明することはちよつと大変。『野馬追文庫』というのがあつてねと言つて説明する方がいい感じがすると思うのです。野馬追は南相馬で千年以上の歴史があるお祭り、地震や津波や原子力発電所の事故があつた今年もおこなわれと説明するのもいいようだし。山内さんが連載してくれている記事にもその名前がある方がしっくりと

してくるのではないかと私には思えるのです。だからロゴとか目立つことではなく、(あしたの本)プロジェクトではその方たちが良いように、受け取っていただく側はその方たちが良いように、名を付けていただければそれでいいと思うのです。

『野馬追文庫』の名はOさんたちと話し合い、了承がもらえれば、山内さんが発してくれたように、『野馬追文庫』に決めたいと個人的に思っています。いかがでしょうか?ただこれは送る方の名称で、各仮設住宅自治会や集会所でどのように呼んでいただいてもまた呼ばなくても良いとは思っています。さて、これは自戒です。

現地で困難に押しつぶされそうになっている方々やその困難に立ち向かおうとしている方々(支えている方達を含む)に出会うと、なんとかしたいという思いが先に立ってきます。しかし、力は限られているのが現実です。『野馬追文庫(仮称)』の重心は

一、子どもたちとその子どもたちを廻る大人(親御さんや祖父母の方だけでなく他の家庭の子どもたちを宝物のように思つてらっしゃる仮設住宅に住む方々)たちに向け、

二、継続して

三、児童図書を送るといふことだと思えます。

いろいろなお話があつて途切れることはあるかもしれないけど、できるだけ途切れず送り続けるということが重要なテーマだと思つています。ですので、もちろん

冒険することも必要な時は来るかと思えますが、無理なく送る（現在もKさんは「無理をしながら」財政的にも人的にも大変なやりくりをされていると思います）が」ということは大変重要なことと思います。ですからKさんもまた山内さんのおっしゃるように、二冊を目標に着実に増やして行くことに賛成いたします。私はいろいろ悩ましい発言をこれからもするかも知れません。」

メールの中に出てきた〈あしたの本〉プロジェクトとは、今回の支援について財政的な支援をして下さるプロジェクトでJ B B IのKさんとのつながりで資金を援助して頂いている。この「東日本大震災 被災地支援活動 子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」は「社団法人日本ペンクラブ（PEN）」「財団法人日本出版クラブ（J P C）」「社団法人日本国際児童図書評議会（J B B Y）」「財団法人出版文化産業振興財団（J P I C）」の四団体が今年の五月に発足させたもので、絵本・児童文学作家の「被災地を応援するメッセージや直筆画」を入札で販売したりして資金を集めている。

Kさんの試算では「ものすごく乱暴な計算で、しかも今の仮設住宅の数のまま、あと八二冊を二四カ所に送ると、二〇〇万円くらいお金がかかるんです！ Wさんがおっしゃった「将来的には五〇箇所」は、目が回っちゃう。〈あしたの本〉が、今後どれだけの予算をここにくれるかは、正直私にもわからないのです

…。一回一回やれることを、と今は思っています。保健師のOさんが、子どものいる仮設だけにしましうかと、前にちよつと言ってくださっていたことがありました。絵本などは大人も癒されるもので、可能ならどこにだって届けてあげたいけど、限界はきつとありますね。一回一回相談させてください。」

一 一月以降に送った本

一月に送る本の選定に当たってKさんから『ゆらばしのおえで』（きむら ゆういち作、はた こうしろう絵、福音館書店）と『きつねにようぼう』（長谷川撰子再話、片山健絵、福音館書店）はどうかという打診があったとき『きつねにようぼう』良いと思います。もう一冊は、この間の立川での話に出ていましたが、センダックの『あなはほるとこおつちるとこ』（ルース・クラウス著、モーリス・センダック絵、わたなべしげお 訳、岩波書店）でも良いかと思えます。私は『うさぎさんてつだつてほしいの』（シヤールロット・ゾロトウ作、モーリス・センダック絵、こだまともこ訳、富山房）が好きなのですが…。という私のメールにすかさずWさんから「山内さん。私も一番好きなセンダックの絵本は、足の長い、格好良い、一生懸命助言して、受け入れられないでも気分を害さず落ち着いて、次の助言をまた考える、ソーシヤルワーカーの鏡のようなうさぎが出てくる『うさぎさんてつだつてほしいの』です。この本を見ては人を援

助するとはこういうことなんだと何回学ばせてもらったことだろう。謙虚になれます。『あな：』は二人でふとんに潜り込んでじっくり時間をかけて読みたいですね。『つぐみのひげのおうさま』も好きだけど。

『うちがいつけんあつたとき』も声に出して読むとなおさらすてきですよ。仮設住宅が終わりになって、それぞれに次の住まいに思いを馳せる時期に良いですね。現状の南相馬を考えると『うさぎさんてつだつてほしいの』ですかね。『きつねにようぼう』もすてきだなー。家族を亡くした子らにゆつくりと語りかけた良い絵本ですね。暖かい色使いの、力強い絵でしたよね。出版されたのは私が図書館から異動（一九八五年）してからあとですよ。選書会議で話した記憶がないから。ちらつとどこかの書店で見たはずという感覚です。『ゆらゆらばしのうえで』は残念ながら私は知りません。二七年離れた図書館員にはついていません。私が思うのに『きつねにようぼう』と『うさぎさんてつだつてほしいの』の二冊です。たぶん受け取る保健師さんたちも見てくれていると思います。だから一月からゴム帯で止めて、受け取る人や運ぶ人が見やすいようにして送りませんか？表を交互にして。

は、好きだった自分のおうちがなくなってしまうたまり、あつても好きならうちに住めない状況の今は、やめたほうがいいですね。選んで購入して送った本、気がついていらしゃるかどうかわかりませんが、今まで送った本は皆日本の作家さんによる作品でした。今回センダックが初めて、翻訳本です。」ということ。○月はこの二冊を送るようになった。

Kさんからは『うさぎさんてつだつてほしいの』について次のようなメールも届いた。「発送作業していたら、事務局長のTさんが、私実はこの絵本が大好きで、選んでくれてありがとうございます。あの（うさぎ）の絵・表情、存在、女の子をナンパしてるみたいともいっていました。ともあれセンダックの「心理」を絵にする力のすごさ！」

一二月に送る本については読み応えのある本をという意見が出た。ボリウムがあつて「大人も手に取るような。男性の大人の方の多くの人は暇を持て余しているような感じもします。夜に仮設住宅を訪ねると、何もできないつらさ、をよくお聞きします。」そこで『二年間の休暇』（ジュール・ヴェルヌ著、朝倉剛訳、太田大八絵、福音館書店）はどうかということになった。『二年間の休暇』には上下二冊の文庫版もあるが古典童話シリーズの分厚い一冊本の方が良いという意見がまとまった。「ちよつとお高いですが、クリスマスに向けて奮発しましょう。」そしてお正月を迎えるに相応しい日本の昔話から「かさじぞう」の紙芝

居（松谷みよ子作、まつやまふみお絵、童心社）を合
わせて送ることになった。

Wさんの現地からの報告

読み聞かせした所

各仮設住宅群の集会所八カ所。のびっこランド（水
曜日一六時から）。南相馬中央図書館児童室。集会所
では、紙芝居を中心に読みました。『おけやのてんの
ぼり』『しりなりべら』『丹下左膳』『しりなりべ
ら』が受けました。しかし、それ以上に『丹下左膳』
が受けました。以下、詳しくはのちほど。小さい子ど
もたちには『ノントンおねしよでしよん』『ぐりとぐ
ら』『おおきなかぶ』。学校があり、小学生以上は参
加がありませんでした。『たけのこめがでた』の歌踊
り。ちよつとした体操にもなります。素話し『おじい
さんが山で草を茹った話し』これは短いお話ですが、
ある所では、一度に三度も受けました。お二人にも聞
いてもらいたいです。いつかきつと。二カ所は折り紙
などで出番なし。でも、サロンが終わった後で、私に
「紙芝居楽しみにしていたのに」と言ってくれた方が
いました。今度かならずと約束しました。「のびっこ
ランド」では、五人の子どもたちが聞いてくれました
た。『おけやのてんのぼり』『しりなりべら』前者が
より受けました。それは南相馬図書館でもおなじ。
『たけのこめがでた』の歌踊り。素話し『くらいくら
い』『おじいさんが山で草を茹った話し』。絵本『ノ

ントンおねしよでしよん』『ぐりとぐら』『おおきな
かぶ』『てぶくろ』その他二冊。忘れてしまいました
た。『けんちゃんとねこはかせ』『だいくとおにろ
く』は限りがないので次回にということになりました。
子どもたちは興奮していました。図書館では、図
書館から本を借りて、『ジャイアントジャム サン
ド』『ノントンおねしよでしよん』『ぐりとぐら』。
紙芝居二冊。素話し『くらいくらい』子どもたち6人と
大人4人ぐらいだったです。楽しかったです。
以上、とりいそぎ。（九月二五日から一〇月一日の南
相馬での読み聞かせ報告）

各仮設住宅では一〇カ所で読み聞かせをしました。
また、学齢前の発達障害を持つている子どもたちの通
所施設「のびっこランド」でも読み聞かせをしました
し、土曜日はすてきな南相馬中央図書館で読み聞かせ
をして帰ってきました。また、お昼に鹿島保健センタ
ーの待ち合いのソファアールではお話しを二つしました。
仮設住宅で最も受けたのは『かっぱのすもう』で
す。絵を見て笑い、話して笑ってくれと、おじいさん
やおばあさんから大受けでした。子どもたちは学校が
始まりあまりいませんでしたが。

『ぐりとぐら』も楽しんでくれました。即興の歌が良
かったみたいです。

東京子ども図書館で仕入れていった『うた遊びの本
二』（たしかさうという題名）の「タケノコめがでた」
の即興うた踊りは、リクエストがあり一カ所では何回

もしました。最後がじゃんけんですので。その本はTさんという若い、最高のグループワーカーとなつていくケアーワーカーさんが興味を示していたので、差し上げてきました。その遊びは、水曜日の四時から訪れた「のびっこランド」の子どもたちに、もう一つ二とせがまれて、即興ででつち上げたものです。ぱつと開いたのがそのページだったので歌つて踊つたら、子どもたちがのつてくれたので、次の日集会所でためしてみたのです。そしたら、金曜日に昨日やったタケノコ一回ではなく三回はやつてとケアーワーカーさんに要望を受け、みんなで踊り歌いじゃんけんをしたのでした。(九月二一日)

鹿島保健センターが避難所から本来の業務へと移行しました。今、幼い子ども、たとえばポリオの、予防接種を行つています。赤ちゃん向きの優れた絵本やぬいぐるみなどが全然ない状態です。原町保健センターに送られたような感じのもの（私はいそがしくてまだ拝見してはいませんが）がありましたら、送つてあげてほしいと思うのですが。『いないいないばあ』（瀬川さんの）とか全くないのです。鹿島保健センター（私たち仮設住宅をめぐるスタッフの昼食を食べる小さな控え室があります）を訪れている乳幼児とのその親の姿を見るにつけ、放射線が発生している中での子どもを育てる、ともにその地で生きる思いが、いかばかりかと思えてなりません。鹿島保健センターでのストリーディングは適当な本がなく、手持ちもなかった

ために、急遽『くらいくらい』と『がらがらどん』を行いました。近所の仮設住宅に住んでいると思われる小学校六年生の女の子とその弟の小学校一年生の子でした。でもお昼になんであの子たちがいたのだろう。金曜日なのに。不安。(九月二二日)

月曜日の午前中に一緒に、午後から別のサロンに行ったケアーワーカーさんが集会所にあつた『かっぱのすもうを』を南相馬の言葉で上演したそうです。一緒に行つた友人の生活保護ワーカーから聞いた話ですが。やつたね。狙いどおりです。(一〇月四日)

今日は立川駅を発つ前にいっぞやの立川図書館に行き、紙芝居『へっこきよめ』（教育画劇）と『うなぎにきいて』と絵本『じゅげむ』を借りようとしました。あいにく立川市在住在勤在学の人でない借りることができないとのことでした。明日のグループワークに間に合わないので（南相馬中央図書館から借りることができないので）訳を言つて頼みました。するとお貸ししましょうと言つてくれました。それでどういうことをやっているのか、どういったことが立川市の図書館で支援出来るのかを帰つてから聞きたいから連絡先を教えると言つてくれました。山内さんが作つてくれた小冊子をお渡ししてお礼を言つて立ち去りました。このように人の世は善意に満ちあふれているという思いを新たにしました。『うなぎにきいて』は貸し出し中でした。お花茶屋図書館のSさんが大阪の言葉

だから若谷にはびったりではと薦めてくれました。『へっこきよめ』も篠さんのお勧めでした。明日から、謙虚に耳を澄まし、活動をしたいと思つていきます。(一〇月二三日)

『サロン活動』(各仮設住宅群の集会所でのグループ・ワーク)に参加しての第一感、被災され『サロン活動』に参加されている皆さんがお元気だということでした。あの方この方と気になつておりましたが、しつかりと生き抜いておられます。それはまずご自身たちの努力があると思います。それとともに、看護師さん保健師さん、ケアワーカーさんや生活支援相談員さんなど『サロン』や仮設住宅、借り上げ住宅に關わつておられる方々の懸命の支えが着実に実を結んでいるのだと感じました。なんとというスタッフの方たちなのでしょう。毎日の途方もない繰り返しをよくこれだけやつてこられていると感激しました。

読み聞かせの報告です。午前中の西町第一という仮設住宅群では、予定された集会所前での野外ミニコンサートが雨のため急遽鹿島保健センターのホールでおこなわれました(西町第一集会所の前にあるそして鹿島保健センターの横にある特別養護老人ホームや西町第二集会所の方たちと合同で)。その後、集会所に移動してサロンが行われた関係で、落ち着かないので読み聞かせはやりませんでした。無理はしないことが大切と思つたのです。

今日は南相馬は晴れ上がり気持ちの良い日でした。明

日朝は少し寒くなるとか。(一〇月二四日)

今日もまた最初に感じたことそのままでした。『サロン活動』にこられている方は元氣におなりだし、地元の様々なボランティアのサークルの方々や個人の方々が活躍されています。今日は手芸サークルが大活躍。また、原町区にお住まいの人たちも励ましに訪れられていました。私は手芸が終わつた方の肩をおもみし、『へっこきよめ』を読んで氣分を変えてもらい、『たけのこ芽が出た』で身体を動かすということをしただけです。手芸を終えた方が「終わりましたよ。ねえ、せんせい(私のこと)」とマッサージを催促されました。そこで、それまで熱心な手芸を眺めてお話をしたりしていたのですが、肩をお揉みし始めました。私のサロンでの役割は、変わりなく今月も集会所に顔を出したとと氣分を少し変えるというものに変わつていのです。楽しかったです。

のびっこランドでは今日は六人の子どもたちに絵本の読み聞かせとお話をしました。ある子は「W」と叫んでいました。まずはリクエストされ「くらいくらい」を。みんな聞いたことがあり安心して怖がついていました。その後、先月からの約束の『けんちゃんといまはかせ』一五年ぶりのぶっつけ本番です。『しつぽ』。休憩のために『たけのこ芽が出た』でじゃんけんをし、『三びきのやぎのがらがらどん』『ねずみくんのチョコッキ』。リクエストが続きます。『だいくとおにろく』も先月からの約束だったので、時間が

なく（お迎えの時間が迫ってきました）途中まででいいと聞いて「うん」と言ってくれたので鬼が出てくるまでを。その後、持つて行った絵本（読んだ本以外は『じゅげむ』『ノントンおねしょでしょん』『一匹のねこ』『おおきなかぶ』『へっこきよめ』）を自由手にしてもらい終わりました。次こそ『だいくとおにろく』を。

七月に絵本の読み聞かせを聞いてくれた子が、すっかり本が好きになり、一人で絵本を見る中で、ひらがなが読めるようになったとのことでした。うれしいです。（一〇月二六日）

『じゅげむ』について

「午後の寺内塚合仮設住宅集会所では、室内でのコンサートだったので、紙芝居『へっこきよめ』を読み皆で大笑いしました。その後『じゅげむ』を読みました。はじめは時間が押しているし紙芝居だけと思ったのでした。絵本を読んでから、紙芝居だけの方が良かったと後悔しました。皆さんは笑ってはくれませんが・・・あまりに紙芝居がうけたので欲張ったのです。送られて来ている本を紹介したいという思いが強かったのです。絵本の読み聞かせということからしては不純な動機でした。微妙な変化の違いかも知れませんが、私は余計なことをしてしまったと感じたのでした。紙芝居のあとで絵本という逆の順番ということもあつたし、私が読みこなしていなかったということも

ありました。読むことに必死で聞いてくれている人の目をしっかりと見ていませんでした。プログラムもその後も押し押せだったということもあつたのだと思います。少し慌てて読んだかも知れませんが、それで私の焦りも聞いてくれてる人に影響したと思います。そういうことを棚に上げてのことですが、『じゅげむ』を読んでいま感じていることを正直に書きます。間違っているかもしれないと恥ずかしいですが、数人の子どもの前で読む（それが『野馬追文庫』の目的です）には良いのだけど、全て大人の方たちを前にして読むのはちよつと伝わりが鈍いと感じました。読んでいて、山上憶良が出てくるところを端折りたいと思いましたが（焦りかも知れませんが）。また、じゅげむの名前を繰り返すことが大勢の大人の前では一番の面白いところなんだと思うのです。近所のおばさん↓母親↓父親と二カ所が落語の説明で省略されている、そのところを、今度読む時には、名前をそれぞれに特徴を持って、二回読みたいものだと思いがら読んでいました。四〇人近くの大人を前にして読んでいての率直な感想です。一人で絵本を見る時、繰り返さない方が活字を追うのには良いのかも知れませんが。小さな少人数の子どもたちに対してもそうなのかも知れませんが。対象や読み聞かせの状況でたいそう変わってくる絵本なのではないでしょうか。活字のサイズを変えるとか、場面を増やすとか、どうにかしてあの面白さを表現出来ないのかと思っています。今後

『じゅげむ』にまたトライして、もう一度考えたいと思います。ですが『じゅげむ』は子どもへの愛情が素直に出た良い絵本という山内さんのご意見はそのとおりだと思います。何回か下読みをしていて強く感じました。また読み聞かせをしていてもそれは感じる事ができました。とりわけ前半の「子室」の所の前までにそれは十分伝わってきました。転調が少し長いのと、三回の名前の繰り返しですが一回になっているのが、もったいないな〜と思いました。

お二人の忌憚のない意見をお聞かせください。」

「Wさん、報告ありがとうございます。『じゅげむ』は最近、幼児番組などでも取り上げられ、学齢前の子どもでも名前を諳んじているくらいですので、どうかなと思いました。またこの本を通してお年寄りとお子どものコミュニケーションが良い形で生じればという期待もあります。高齢者施設でも良くやりますが、バカ受けはしませんけれど皆さん良く聴いて下さいませ。絵本を読む場合には紙芝居よりも一層その場の雰囲気や状況が大きく左右します。さらに読み手の心の持ちようでもうまくいったり、ギクシヤクしたりするのも毎度のことです。全体のプログラムがどんな物だったのか分かりませんが、コンサートということであれば、皆さんの主な期待はそちらの方にあつたのかもありません。おっしゃる様にこの話のおもしろさは、名前を繰り返すところだと思えますので、必要に応じ、またその場の雰囲気によって何度でも名前を繰り返

返して良いと思いますし、落語がそうであるようにその場その場で加えたり削ったりしてもよい絵本なのでしようね。今手元に絵本がないのですが、今度高齢者施設でやってみようと思います。」（山内の返信）

丹下左膳について

「お花茶屋図書館のSさんやRさんに紙芝居が受けてと報告して、また腹を抱えるやつを選んでお願いしたら、山内さんがすごくまいからWもやってみたらと言っているので『黄金バツド』や『丹下左膳』も借りていったのです。あと『しりなりべら』と『おけやのてんのぼり』も。高齢者が多い「サロン活動」では、『しりなりべら』がうけましたがそれ以上に受けたのが『丹下左膳』でした。宝壺の巻第5巻というものでした。読んだあと、地元の、経験が豊かそうなSさんという生活支援相談員さんが「Wさん、相馬に丹下左膳の墓があると思う」と言ってくれたのです。はつきりとはわからないので調べてみるのとこのことでした。午前中のサロンが終わる一二時頃話したのです。三〇分経つか立たないうちに電話が入り、丹下左膳は架空の話で墓はないが石碑があるとのことでした。津波でどうなったかわからないとも言っておられました。岩子（いわのこ）字長谷地というところにあるそうです。宇多川が流れ込む、松川浦の内側の浜です。五月路線バスに乗った時はその遙か手前の国道六号線のバイパスを少しこえたところでバスはUターンしました。コ

ンビニの前の道路に大きな漁船が横たわっていました。それから先は行けなかったのです。水が周りを浸していました。サロンのケアーワーカーの方に岩子が地元の方がいて、聞くと石碑は巨大なもので津波に堪え残っているとのことでした。回りにあった岩などは流されてしまったが。小説か映画が相馬藩の家臣という設定なのだそうです。さて、そこで、丹下左膳の続き（宝壺の巻第六巻）はあるのでしょうか。「次巻に続く、またのお楽しみを」と言ってきたのですが。Sさんに聞くと単発で五巻だけが出たのではないかとのことでした。もしなければ、手塚治虫さんの『こけ猿の壺の巻』や大河内伝次郎の『丹下左膳余話 百万両の壺』を参考に作るうかな。絵はだめですが、シナリオは何とかなるのではと思っっているのですが。巨大プロジェクトですが。月に一卷ずつ二年がかりで。Sさんは無責任にも「作ったら」と言っただけじゃありません。

現在は来年の一月に何を送るかを検討している。「野馬追文庫」の活動について、Wさんが次のようなメールをくださった。「自ずと三人の役割が決まってきましたね。実務のKさんを中心に山内さんの広報と私の現地報告と。三人で本を選ぶのは怖いけど面白いです。生活保護などをめぐり厳しい状況にあります。『野馬追文庫』は私にホッとすることのゆとりをくれます。たぶんOさんたちもですよ。」

「東京漢点字羽化の会」例会・講習会報告と わたくしごと

木村 多恵子



第71回例会 2011年10月12日(水)13:30

15:30 場所 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

10月15、22、29、11月5日の「花をひろう」の当番の組み合わせを決めた。

10月19日に横浜での点字印刷に行っていた方をお二人決めていただいた。

この秋、「横浜漢点字羽化の会」がNHKボランティアネットを通じて、新しく会員を募ったように、東京でも来春募集しようという話がまとまり、横浜と東京の活動状況を纏めて、東京の募集要項と一緒にNHKネットへ投稿することにした。

日程は以下の通り、

2012年2月8日(水、例会込み)、竹芝小ホール、13:30～15:30

2月22日(水)竹芝小ホール、13:30～15:30

3月7日(水、例会込み)竹芝小ホール、同

講座内容は本年の、東京と横浜の講座内容とほぼ同じ。来春入会していただく会員には、現在全員で行っている「古語辞典」の入力に入っていたいただき、「花をひろう」にも参加していただくことになると思う。

古語辞典について… ルビの付け方、数字の書き方、括弧の扱い方、出展の書き方など、新ためて確認した。

古語辞典の入力用原本を、各自進捗状況によって、お持ち帰りになった。一人が原本数ページに渡って続けて持ち帰っても、校正をしやすいように、2ページずつを1ファイルとして、1ファイルずつ次の校正者に回していただくことにした。

寺山修司の歌集は入力をほぼ終えて、表紙と目次を整えて完成となった。今年の3月から新メンバーによる入力、Sさんの纏めによって仕上がり、そのパワーに驚いている。皆様ありがとうございます。

11月の例会(第72回) 11月9日(水) 13・30
15・30 港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

10月24日に「機関誌羽化第88号」を送付した。

いつものように11月12、19、26、12月3日の「花をひろう」の入力担当グループを決めた。

11月16日の横浜での点字印刷をしていただく方を決めた。今月はお一人で行ってくださることになった。よろしくお願いいたします。

「パソコンによる漢点字入力ボランティア」の会員募集講座情報を、「NHKボランティアネット」に掲載するために、本会の活動報告と募集要項の文案を作る。また、会員募集要項を、東京都社会福祉協議会が運営する、「東京ボランティア市民活動センター」にも、前回到引き続き掲載する。

「岩波古語辞典」の難解文字を、字式を用いてでどう表すか、皆さんで検討した。

「寺山修司歌集」の目次と表紙の校正もほぼ終えて完成された。皆様本当にありがとうございます。

来春募集のボランティア講習会について… 2012年2月8日、12時に集合し、2月の短縮例会を行い、13時から受け付け、13・30～15・30、第1回目の講習会を行う。(竹芝小ホール)

2月22日、13・30～15・30(講習会第2回目)、竹芝小ホール

3月7日、11時から第1会議室にて、3月の短縮例会を行う。その後、13・30～15・30、竹芝小ホールにて、講習会第3回目を行なう。何れも水曜

* 予告

12月の例会(第73回) 12月7日(水) 14・30～16・30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

12月の学習会(第56回) 12月17日(土) 18・30～20・30

ヒューマンプラザ7階第1会議室

1月の例会(第74回) 2012年1月11日(水)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 13・30～15・30

「漢点字羽化の会」総合新年会、2012年1月15日(日) 13時より、横浜桜木町・ブリーズベイホテル

1月の学習会(第57回) 2012年1月21日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 18・30～20・30

2月の例会(第75回)と、パソコンによる漢点字入力ボランティア講習会(第三次の1回目)、2012年

2月8日(水)、ヒューマンプラザ7階、竹芝小ホール、12時から2月の短縮例会、13時受付、13…30…30講習会、

2月の学習会(第58回)2012年2月18日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室18…30…20…30講習会(2回目)2012年2月22日、ヒューマンプラザ7階、竹芝小ホール、13…30…15…30

3月の例会(第76回)と講習会(第3回目)、2012年3月7日(水)、ヒューマンプラザ7階 11時、第1会議室にて3月の短縮例会、13…30…15…30、講習会第3回目、竹芝小ホール

3月の学習会(第59回)2012年3月17日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室18…30…20…30

わたくしごと

わたしは家事仕事が大好きだ。

本を読んだり、パソコンを使ったりして、疲れた頭をほぐすのは、なんといつても家事仕事が一番だ。本当は植物が一杯の自然の中を一人で散歩したいのだけれど、それはままならないことなので、手近で、当たり前の家事仕事に切り替えるのがうってつけである。

とくにいろいろなお野菜を刻んでわたし流の料理、というにはおこがましいけれど、にんじん、大根、蓮やお芋の類などの根菜類、椎茸、シメジその他の茸類、きゃべつや白菜、ほうれんそう、からし菜、わさび菜、せり、三つ葉、その他の葉物や香味野菜など、

なるたけ沢山の種類をそろえて、お気に入りのおまな板で煮物用、炒め物用、お浸し類など、使い方に併せて切り方を決めて、トントンと刻んでいるうちに、頭も身体もリラククスして、豊かな気分になってくる。凝り固まった肩もほぐれてゆく。

煮物やお味噌汁用に、これもお気に入り、手触りのよい木組みの美しい、鯉節削り用の鉋を入れた木箱を出して、鯉節を丁寧に削る。

お魚は焼くか煮るかに決めている。少し時間に余裕があるときは、これも大好きな厚手のテフロン加工の四角い、厚焼き卵用のフライパンを使って、たっぷり厚焼き卵を焼く。そんなとき、焼き上がった卵の形は、少々崩れてもリッチな気分になれる。

てんぷらのような揚げ物は、ここ数十年やっていない。てんぷらは食べ手が少ない二人分といっても、沢山の種類をひとつ、ふたつずつ、イカもお魚も、当然お野菜の何種類かもそろえたいので、それらを揚げているうちに、お腹が一杯になってしまい、肝心な食事のときにはもう、てんぷらもカツも食べたくなくなるほど、脂の臭いに辟易してしまふ。そして本当に美味しいはずの、出来たてを実際には食べられない。

もう一つ、揚げ物をやらなくなった理由がある。それは、お餅をアラレ状に切ってカキモチを作っていたときのことである。カキモチを揚げ終えて、丁度火を消したところで、突然大きな地震が襲ってきた。揚げ物をするときわたしは、何時も、脂が少なくてすむ、

中華鍋を使っていたので、このときとつさに、この中華鍋がガス台から転げ落ちたら大火傷をする、と思っただ。この程度の揺れならわたしの手で鍋を持って流しに移した方が安全だ、と判断した。ガス台と流しとの距離は約一メートルほどである。わたしは必死に鍋を持って流しの中に脂を捨ててから、その鍋を流しの中に置いた。恐ろしさで緊張から身体が震え、冷蔵庫に背をもたせて床に足を投げ出してヘナヘナと座り込んでしまった。胸の動悸と腰のキンキンする痛みが同時にやってきた。地震は収まっているのに、10分か20分以上は動けなかった。やがて拍動性の腰の痛みが徐々に治まり、そろりそろりと立ち上がって、揚げあがったカキモチを、お塩を振るものと、お砂糖を絡めるものに分けて処理し、流しに置いた中華鍋と、脂まみれの流しを洗い終えて一息すると、恐ろしさがよみがえって、寒気がするほど身体が震えだした。居間へ行って、布団も敷かず、炬燵に足を入れて寝転んでしまった。

最初の揺れがきたとき、「大丈夫か？」の夫の一声に、やっと「大丈夫」とだけ応えた。むしろそばへ来て、わたしの行動や衝撃を知られたくなかったからである。夫が聞いているラジオから、震源地は八王子で、震度は、東京都区内は4というのが微かに聞こえていた。あれは真冬でも真夏でもない。いいえ、お正月のお餅をカキモチにしたのだから、まだ寒い季節だったが、ストーブ類を使っていなかったのは助かった。

た。
この恐ろしい体験をしてから、揚げ物はパツタリと止めてしまった。

そんな訳で、今年の3月11日の東北地震直後にわたしは自分の、この体験を思い出した。言ってみればわたしの恐怖は一過性のものであったのだ。けれども東北の方々だけでなく、関東でも大きな地震に遭遇し、被害の大きかった皆様の恐怖とその後の困難さは、わたしの想像以上と思う。

お掃除の時間は頭の疲れをほぐすというより、むしろ自分の思いに耽ることの多い時間である。掃除機を使うのも、床拭きも、動作は単純だからだろう。床の拭き掃除はよほど汚したときでなければ日に一度か二度で、たいていは朝食をすませてから、台所の後片付けの仕上げのように、床拭きをしながら、今日すぐやらねばならないこと、今日の外出のことなど考える。その日家に居られるときには一層自分の思いに沈む。苦しいこと、辛いこと、悲しいこと、自分自身が情けなくて落ち込んだりして、その喜怒哀楽は様々だ。もちろん楽しいことうれしいことにも心が動き、幸せな気分になることだつてある。

あるとき、ふと床拭きをしながら、わたしがこの家に越してきたころの、この床掃除の大変だったことを思い出した。

このフローリングは荒削りのもので、そのころわた

しは、暇さえあれば床拭きをしていた。わたしの手はごつごつのに、手のあちこち、指といわず手の平にも甲にも、棘（とげ）が刺さる。皮膚が切れてお湯や水が沁みる。ぞうきんを絞っても、そのぞうきんに刺さった棘でわたしの手はさらに切れた。それほど最初の

フロリングはひどかった。ところがあれから8年経った今日このごろでは自分でもびつくりするほど床はスベスベになっている。もともと粗末な素材なので見た目はたいして変わらないのかもしれないけれど、少なくとも、わたしが触れるかぎりには表面のささくれだつたガサガサはなくなっている。残念ながら、まだ押し入れの敷居は、ぞうきんを往復させるとかならず棘を刺してしまうので、一方方向にぞうきんを動かさなければならぬ。この押し入れなどの敷居は未だにわたしを悩ませているが、さすがに台所の床板は、どの方向にぞうきんを動かしても、もうとげを刺すことはなくなった。それに気づいたとき、「積み重ねの結果」なのだ、こんな小さなことでうれしくなった。

ただ、我が家のフロリングは特別なのだろうか？ ひどく静電気を呼んで、埃が付きやすく、今拭いたばかりだというのに、何か床に落したものを拾おうとすると、目的の捜し物より先に埃が手についてくるのである。これにはがっかりして、最初は何度でも繰り返し拭き直していたが、さすがに諦めて、近頃は日に一度か二度の拭き掃除ですませている。

この家に越す前の家は、昭和25、6年頃に建てられ

たものなので、特別いい素材ではないけれど、間違はなく本物の木なので埃が付くことはなかった。この点だけは古い家が懐かしい。

家事仕事の3大要素は、掃除、洗濯、料理といえようか？さてその洗濯は？

わたしが結婚する頃はもう既に洗濯機はほぼどの家にもあったけれど、早くから父親代わりの兄は、「冷蔵庫も洗濯機もそろえてやりたいけれど、ちよつと大変なのでどちらか一つにしてくれないか？」と言った。わたしは即座に、「冷蔵庫の方が高いので申し訳ないけれど、洗濯なら自分でできるので、冷蔵庫を買ってください」と頼んだ。兄は「なるほどそういう理屈か、じゃ、冷蔵庫を買ってやるぞ」と言ってくれたのだ。

従って結婚してから長い間、シーツも布団カバーも手で洗っていた。特別苦労とも思わなかったが、かなり経ってから、引越など家の事情が変わり、洗濯機を買おうと決めたとき、わたしは兄に、なんとなくすまない気がして、「洗濯機を買ってもいいですか？」と話してみた。兄は「おう、よかったな」と喜んでくれ、むしろ、「そろえてやれなくて悪かったな」と言わせてしまい、ちよつとわたしは困ってしまった。

そんな時代を経て、近頃では手で洗うものはウールのセーターや特別の衣類だけと、限られたものに減っ

ている。

洗濯というのは、洗って、干して、取り込んで、たんで、箆箆に仕舞うまでをいうのだと思う。ところが、ときどきわたしは朝干したものを、慌ただしく、もう乾いたかな？と今すぐ着たいものの乾き具合を確かめて、そのまま身に付けそうになる。すると優しく懐かしい母の声が聞こえる。「せめて一度はたたんでから着なさい」と。わたしははつとして時間がなければ、急いで簡単に袖畳みだけでも、形ばかりの真似事をしてから着ることにしている。母は、乾いたら、きちんと畳んで箆箆にしまうもの、着るときは箆箆から出すものだと言っていた。確かに自分以外の人（たとえば姉や姪親子）の衣類は丁寧なたたんでいる。

この「衣類をたたむ」という行為には特別な意義がありそうだ。食事もともにすることより、その人の衣類を畳むという実質的な行いは、その人と、より近い関係が生じているからだろう。たたみながら持ち主のことをごく自然に考え、その人の魂を包み込み、わたしからの愛も注ぎ込んでいるからである。

このことに深く気づかされたのは、フランクルの『夜と霧』を読んでいたときのことである。

「あのアウシュヴィッツの捕虜収容所で、最後まで精神を乱さずにいられた人の日常の行動をよく観察し

ていると、日々の小さなことからを忠実に丹念に、しかも黙々とやっていた人たちだった。たとえば、あてがわれた粗末な衣類を毎日丁寧に畳み、衣類のほつれは小さいうちに、とれそうになったボタンは、落ちないうちに修復する、という人たち」

と書いている。ここを読んだとき、わたしは深い感動と衝撃を受けた。簡単そうだが、人の生き方を大きく担い、日常の小さなことを誠実にやるのが、大きな支柱になるのだと！

2011年11月28日(月)

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成23年度 第7回(第53回) 報告

- 1 日時 平成23年10月22日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 周知事項

学習会日程

- 11月19日(土) 18時30分～、12月17日(土) 17時～
19時～ 忘年会 東海飯店
新年会 1月15日(土) 13時～15時、ブリーズベイホ
テル4F・游波(ゆうなみ)

5 使用教材

漢点字学習用テキスト初級編 第五回(全十回)

レーズライター 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、星、仮、坂、阪、晶、假、板、飯、返、版

6 学習内容

初級編第五回

6 基本文字 (4)

発音文字と漢数字 (二)

1. 発音文字とは仮名点字と同じ読みで表される文字

・ 前回の復習(省略)

・ 今回の学習

(6) 「争^{ㄨㄥ}」 ソ(2・4・5・6の点)と

(2・5の点)で表す。字式はク・イン。音読みのソウは漢音。争をパーツとする字に「静」「浄」

「箏」などがある。熟語に「論争」「争議」「政争」「争点」「付け争う(つけすまう)」「馬が人の乗るのを嫌って尻を横へ振り向ける」「辻争い(つじすまい)」「馬が進むのを嫌がる」などがある。

平成23年度 第8回(第54回) 報告

1 日時 平成23年11月19日(土) 18時30分〜20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者(省略)

4 周知事項

学習会日程

12月17日(土) 17時〜

1月21日(日) 18時30分〜

新年会 1月15日(土) 13時〜 ブリーズベイ(桜木町)

5 使用教材

漢点字学習用テキスト初級編 第五回(全十回)

6 学習内容

初級編第五回

6 基本文字 (4)

発音文字と漢数字 (二)

1. 発音文字とは仮名点字と同じ読みで表される文字

・ 前回の復習(省略)

・ 今回の学習

(7) 「対^{ㄉㄞ}」 タ(1・3・5の点)とイ

(1・2の点)で表す。字式は文十寸。旧字体の對は板を2枚立て板の間に土を入れ固めるといふ建築法(版築)。寸は手を意味する。音読みのタイは漢音、ツイは呉音。タイは相対する意味、ツイは二つで一つという意味に使われる。対幻想(ついげんそう)とは男女二人で作り上げる世界。熟語に「応対」「対応」

「対面」「初対面」「対策」「対人」「対物」「対話」「絶対」「反対」、地名・人名に「対馬、対島(つしま)」がある。

(8) 「**扌**」 ハ(1・3・6の点)とイ

(1・2の点)で表す。字式は手偏十一・三\。旧字の「拜」は草花を手折る形で、古代人が若菜を摘む姿が神に向って拝礼する姿に似ていることから「おがむ」となった(常用字解)。音読みのハイは漢音。熟語に「拝見」「拝謁」「拝復」「空拝み(そらおがみ)」「うわの空で拝むこと)」「親拝(しんぱい)」。天皇自ら参拝すること)」「拝所(うがんじよ)」。沖繩地方で神を拝む場所)」などがある。

(9) 「**反**」 ハ(1・3・6の点)とン
(3・5・6の点)で表す。字式は雁垂れ)又。雁垂れは反り立った崖、又は右手で、右手で崖をよじ登る形の文字。音読みのハンは漢音、タンは慣用音、呉音にホンがある。熟語に「反映」「反射」「反転」「違反」「反感」「反響」「反抗」「反目」「反則」「反復」「減反(げんたん)」「反面教師」「反っ歯(そっぱ)」「外反母趾」「仰け反る(のけぞる)」「反故(ほん)」「反吐(へど)」「二律背反(にりつはいはん)」などがある。

(10) 「**民**」 ミ(1・2・3・5・6の点)とン(3・5・6の点)で表す。音読みのミンは漢・呉音。熟語に「移民」「救民」「難民」「庶民」「民芸」「原住民」「植民地」「四民(江戸時代の身分制。士農工商)」「三民主義(中国近代国家の政治理論。民族主義、民権主義、民生主義)」

「報告と」案内

一 『漢点字紹介』

本号冒頭でお断りしたように、「漢点字の散歩」で取り上げて参りました『漢点字紹介』が、著者の都合で掲載できなくなったこと、お詫び申し上げます。内容的にはあと一回で終了の予定です。

二 図書館への納入書

本年度、横浜市中央図書館へ納入する漢点字書は、「日本語大博物館」と「寺山修司歌集」の予定で、今編集の仕上げ段階に來ております。年明け早々には点字印刷、製本の作業を経て、図書館に納入されます。

三 会員募集の結果

横浜漢点字羽化の会では、新会員募集のために10月、11月に延べ三回の講習会を開催しました。実際に受講された方は三名で、どなたも熱心に受講され、その後引き続いて新会員に登録されて、我々の活動を支えてくださっています。



小さな智恵と大きな智恵、
短い生命と長い生命

(『莊子』 逍遙遊篇より④)

小知不_レ及_ニ大知_一、小年_ハ
不_レ及_ニ大年_一。奚_ヲ以_テ知_ル其_ノ
然_ル也。朝菌_ハ不_レ知_ラ晦朔_一、
蟪蛄_ハ不_レ知_ラ春秋_一。此小
年也。楚之南有_ニ冥靈_{ナル}者_一。
以_テ五百歳_ヲ為_シ春_ト、五百歳_ヲ
為_シ秋_ト。上古有_ニ大椿_{ナル}者_一。
以_テ八千歳_ヲ為_シ春_ト、八千歳_ヲ
為_シ秋_ト。而彭祖_ハ乃今以_テ久_{シキヲ}
特_ニ聞_{コエ}、衆人匹_{バントス}之_ニ。不_ニ亦_タ
悲_{シカラ}乎_一。

(前号より続く)

小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばず。奚を以て其の然るを知るや。朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なり。楚の南に冥靈なる者有り。五百歳を以て春と為し、五百歳を秋と為す。上古に大椿なる者有り。八千歳を以て春と為し、八千歳を秋と為す。而るに彭祖は乃ち今、久しきを以て特に聞こえ、衆人これに匹ばんとす。亦悲しからずや。

小年、大年 寿命の短いもの、長いもの。
朝菌 昼の短い間だけ出るキノコ。
晦朔 晦(夜)と朔(朝)。蟪蛄 セミの一種。
冥靈、大椿 何れも実在不明の長寿の木。
彭祖 七百歳(あるいは八百歳)まで生きたとされる伝説の人。

上には上があり比べることには意味がない。すべてを超越し、無限大の物差しで見ればみな同じである、とこの後、莊子の思想は展開していく。



小 知 ハ 不 及 バ 大 知 ニ、
 小 年 ハ 不 及 バ 大 年 ニ。 奚
 ヲ 以 テ 知 ル 其 ノ 然 ル ヲ 也。
 朝 菌 ハ 不 知 ラ 晦 朔 ヲ、
 蛄 ハ 不 知 ラ 春 秋 ヲ。 此
 レ 小 年 也。 楚 之 南 ニ 有 リ 冥 靈
 ナル 者。 以 テ 五 百 歳 ヲ 為
 シ 春 ト、 五 百 歳 ヲ 為 ス 秋
 ト。 上 古 ニ 有 リ 大 椿 ナル
 者。 以 テ 八 千 歳 ヲ 為 シ 春
 ト、 八 千 歳 ヲ 為 ス 秋 ト。 而 ル
 ニ 彭 祖 ハ 乃 今 以 テ 久 シキヲ 特 ニ
 聞 コエ、 衆 人 匹 バントス 之 ニ。
 不 亦 タ 悲 シカラ 乎、 や。
 ~ 虫 偏 + 惠 けい



そうし
 莊子

前369～前286年(?)

参照図書：「朗読してみたい中国古典の名文」
 渡辺精一（祥伝社新書）



漢点字講習用テキスト

初級編 第29回

5 複合文字 (2)

1. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (1) (承前)

(13) 送  ソウ おく - る

上に二つの点を付けた「天」に、「しんによう」を加えた形の文字です。上に点を二つ付けた「天」は、ものを手で捧げ持つ形を表しています。「おくる」とは、ものを運んで人に与える、人との別れに際して、その人を送り出す、亡くなった人との別れ等の意味があります。漢点字では、「 (しんによう)」と「 (天)」で表されます。

「送別」「送迎」「送金」「郵送」「放送」「送り仮名」「送り主」「先送り」「野辺送り」

※「夫」を部首として含む文字二つ。

(14) 規  キ

「夫」の右側に「見」を置いた形の文字です。「夫」は矢の形を表していて、真っ直ぐな矢を組み合わせて、整った円を描くことを意味しています。「ぶんまわし」、すなわちコンパスのことです。そこから世の中のルール、「規則、規範、規準」と用いられます。漢点字では、「 (夫)」と「 (見)」で表されます。

「規則」「規範」「規準」「規模」「規律」「規定」「規程」「定規」「法規」

(15) 贊  サン たす - ける ほ - める

「夫」を二つ横に並べて、その下に「貝」を置いた形の文字です。「夫」は、元は「先」で、先へ先へと進めることを意味します。「貝」は、ものを手で持って捧げる形を表します。「さん」は、脇から手を差し伸べて助けること、同意を示すこと、また、考えや意見に賛同して褒め称えることを表します。漢点字では、「 (貝)」と「 (夫)」で表されます。

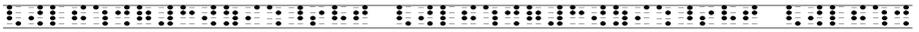
「賛成」「賛同」「賛助」「賛美歌」「賞賛」「礼賛」

※「小」を部首として含む文字。

・「肖」とそれを部首として含む文字一つ。

(16) 肖  ショウ かたど - る に - る

「小」の下に「肉」を置いた形の文字です。この「肉」は、



“にくづき”です。切ったり削ったりして、小型の似姿を作ることを意味しています。そこから、“ちいさい”という意味も生まれました。“不肖”とは、親に似ず愚かなことを言います。漢点字では、「𠄎 (小)」と「𠄎 (肉)」で表されます。

「肖像画」「肖似」

(17) 消 𠄎 𠄎 ショウ け-す き-える

「さんずい」の右側に「肖 𠄎 𠄎」を置いた形の文字です。水が小さく細って行く様子を表しています。“けす、きえる”と読んで、水やものの姿が、細く小さくなって、見えなくなることを意味します。また“しょう”は、控えめであること、ものを費やすことという意味も含んでいます。“消火”は火を消すこと、“消化”は栄養を吸収するための運動と作用、“消費”は生活やレジャーに必要なものを購入し費やすことを言います。漢点字では、「𠄎 (さんずい)」と「𠄎 (肖)」で表されます。

「消火器」「消化器」「消費」「消極的」

※「低 𠄎 𠄎」の旁を部首として含む文字一つ。

(18) 底 𠄎 𠄎 テイ タイ そこ

「まだれ」の中に、「低 𠄎 𠄎」の旁（低の偏は人偏）を置いた形の文字です。「低 𠄎 𠄎」の旁は、「氏 𠄎 𠄎」の下に一を置いた形で、地面を平らに均して、人が住めるようにされた状態を表しています。土地を均すと、周りより低くなります。「まだれ」は、建物を意味していて、均された土地の低いところに建物が建っている様子を表すのが、この文字です。

“そこ”という読みは、低いところという意味から生じました。漢点字では、「𠄎 (まだれ)」と「𠄎 (低の旁)」で表されます。

「海底」「水底」「心底」「底なし」

※「氏 𠄎 𠄎」を部首として含む文字一つ。

(19) 紙 𠄎 𠄎 シ かみ

「糸 𠄎 偏」の右側に「氏 𠄎 𠄎」を置いた形の文字です。「氏 𠄎 𠄎」は、氏族を象徴する刀を象っていますが、ここでは、平らに均すという意味と、“し”という音を表しています。木の皮の繊維を漉き合わせて作るのが“かみ”で、糸偏は、その繊維を表しています。漢点字では、「𠄎 (糸偏)」と「𠄎 (氏)」で表されます。

「紙幣」「和紙」「用紙」「雁皮紙」「羊皮紙」「紙入れ」「美濃紙」

編集後記

▼ずっと連載で本誌の冒頭を飾っていた「漢点字の散歩」が、休載せざるを得ないことになってしまいました。その辺の事情については、後でご報告することになるかと思えます▼「報告と案内」の欄で報告しましたように、今年のボランティア募集のための講習会には3人の方が参加され、熱心に受講されて、新しい会員として当会の活動に加わっていただいています▼「漢字かな交じり文をそのまま入力してテキストファイルを作れば漢点字への変換は自動的にできてしまう」というのがそもそも漢点訳作業ではあるのですが、一般の文章をいざ漢点字で表現しようとする、いろいろの制約に遭遇します。墨字の世界では曖昧に使われていて、普段の読書では気にならない文字や記号の違いなど、初めての人には理解するのが難しいようなことが多々あります。短時日の講習ですべてを理解することは困難で、その後の活動の中からいろいろ学んでいただくということになります▼受講者が多くないということは、講習を進めていく上ではかえって有利で、きめの細かい指導ができます。これからも少数の受講者相手に、毎年でも講習会を開こうと考えているところです。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。